

2018年11月20日(火)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 ピーター マクミランさん WS 英訳にチャレンジ・翻訳の方針

1,10 回目のご来館

マクミランさん 10 回目のご来館 (11 月 20 日) では、前回に引き続き和歌を専門とする若手研究者・米田有里先生 (湘北短期大学非常勤講師) をお招きし、卷子本『阿不幾集』^{あふぎしゅう} についてのワークショップを行いました。

2, あやめとかきつばた

ワークショップでは、『阿不幾集』の和歌について先行研究をふまえながらよりよい解釈・英訳を検討しました。

検討したのは以下の四首です。

- ・住吉の松の葉越しにながむれば 月おちかかるあはぢしま山
- ・ゆき暮れて木の下影を宿とせば 花や今宵のあるじならまし
- ・よりにこそそれかとも見め黄昏に ほのぼのみえし夕顔の花
- ・こやの池あやめにまじるかきつばた 花ゆへにこそ人にとはる

れ

このうち「こやの池～」は、少し解釈が難しい和歌でした。



上の句の「あやめにまじるかきつばた」について米田先生は、次のように先行研究をひいて、両者がよく似ているとされていると説明してくださいました。

昆陽の池では繁茂する菖蒲が「八重葺きの葦ならねども年ふれば菖蒲ふまなし昆陽の池水」(出観集)と詠まれたのに対し、一方の杜若は「昆陽の池の汀に立てる杜若浪の折ればやまばらなるらん」(清輔集)と、まばらなさまが詠まれている。菖蒲に交じって目立たない杜若も花が咲けば人に知られる存在となる。

(『正治二年初度百首』補注(『和歌文学大系』49、明治書院、2016年、渡邊裕美子執筆)

2018年11月20日(火)



マクミランさんは最初、次のように訳されました。

When they are in bloom
In the pond of KOYA
We cannot tell apart
The blue flags from the iris stems
And that is why we visit

かきつばたがあやめに「まじ」っているのはなぜなのか。「花ゆへにこそ」とあるということは、花が咲けば分かるということなのでしょう。つまりこの歌では、まだ花が咲いていないのです。マクミランさんはそれを「stems (茎=花がない状態)」であらわしました。

そして、見分けられるようになった時=花盛りにこそ人が訪れるのだ、という意味を詠み込み、語順を次のように入れ替えました。

In the pond of KOYA
We cannot tell apart
The blue flags from the iris
stems
And that is why we visit
When they are in bloom



かきつばたは「blossom」でも「iris」でも良いのですが、blossomは「bloom (=咲く)」と音が似てしまうため、irisを選択されたそうです。

読み上げたときの音を大切にする感性も重要なですね。

3, 形式と解釈

ところでマクミランさんは、和歌の英訳に際して英語の五行詩としても成り立つように心掛けておられます。和歌は基本的に5・7・5・7・7の形式ですので、31文字に落とし込むという方法もあるそうなのですが、英語にしたときに不自然になると感じ、詩として

2018年11月20日(火)

のレトリックにこだわり、五行詩を目指しておられるのだそうです。

その想いは、日本の現代語訳(和歌の意味)を英訳に置き換えるのではなく、原典の言葉にできるだけ忠実に一和歌がもともと持っている言葉遊びや感性を大切にし、それを活かしながら英語の詩に翻訳しようという重要な方針に繋がっています。

だから、ワークショップで専門家と意見を交換することが大切なのですね。

